

第3回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30)
1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)
19、20は国字で答えること。

(三) 次の1〜5の意味を的確に表す語を、後の□から選び、漢字で記せ。(10)
2×5

1 函谷関の隘路を辿る。

2 唯一人暗窖の底へ降りて行つた。

3 長松謬謬として蒼烟を含む。

4 庭の北端に風霜を経た樛木が立つ。

5 古の道を治むる者は恬を以て知を養う。

6 孔子は顔回に四勿を説いて戒めとした。

7 今は貌姑射の山に住み処を占めたり。

8 縹緲として前後垠鄂有る無し。

9 唯褒斜のみ其の口を綰轂す。

10 義満其の鎧馬の朱殷を視て之を壮とす。

11 彼兵法通典に雜見するも離析譌舛す。

12 此の事聞伝して竟に主君の藏となる。

13 喟然として文藻の涸渴せるを歎ず。

14 玉砌を敷けるが如き夜天であつた。

15 滔滔たる洪水九州を闕塞せり。

16 徵羽の操、鄙人の耳に入らず。

17 陰陽を調理し風雅を變諧す。

18 群臣説僇せざる莫く百姓蹈舞す。

19 沓買わば線鞋の細底を買え。

20 浸潤の諧、膚受の愬行われず。

21 饑神に取り憑かれたらしい。

22 膚に統のような光沢と感触がある。

23 動もすれば旬日に弥る。

24 儻いは其の二心有らんことを恐る。

25 身を卑くして伏し、以て敖ぶ者を候う。

26 雑木林に尉鵠の甲高い声が響く。

27 門に入りて拝せず、雄弁を騁す。

28 ただ片才を聞き伝えて心を動かす。

29 もみじ葉は風の被くる錦なりけり。

30 振摺りの名残として方二間の石あり。

1 親鳥にハグれた雛宛らに心細かつた。

2 いつにない歓待を頻りにイブかつた。

3 念入りにユカンして経帷子を着せた。

4 里人は神隠しだヒトサラいだと噂した。

5 形勢は容易にはギャクトし難かつた。

6 大軍を投じて敵のインコウを扼する。

7 誰一人オトガイを解かぬ者はなかつた。

8 ホコリマミれの古書が目を吸い寄せた。

9 嘲弄の言にフツゼンとして色を作す。

10 ニジリながら側へ寄つて来た。

11 リンギ書を回して承認を得る。

12 囲炉裏にソダを焼べる。

13 スネハギの延びた奴と罵られた。

14 強制ワイセツ罪の嫌疑を掛けられた。

15 ヨセンカイの演し物に趣向を凝らす。

16 トウカイして本心を窺わせない。

17 久々に尊師のケイガイに接し得た。

18 ケイガイ故の如く親しく語らつた。

19 ヤガてただならぬ仲になった。

20 テンミリリットルを超える服用を禁ず。

- 1 天下国家を治めととのえる。
2 清掃の具。また主人に仕えること。
3 とんでもないさま。また戯け者。
4 物事の一面しか見ない者。
5 劫初、劫末に吹くという暴風。
- あもう・きそう・けいりん
すかんぴん・たんぱんかん・びらんば
べらぼう・らいいてい

(四) 次の問1と問2の四字熟語について
答えよ。(30)

問1
次の四字熟語の(1〜10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。(20)
2×10

- | | |
|--------|--------|
| (1) 大悟 | 衣錦(6) |
| (2) 思服 | 槁項(7) |
| (3) 鳳集 | 三世(8) |
| (4) 求火 | 翫歳(9) |
| (5) 後重 | 博引(10) |

いっさん・かいじつ・かつぜん
こうかく・こうひょう・ごび
しょうけい・ほうしょう
らんしょう・りきゅう

問2
次の1〜5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)
2×5

- 1 いかにも得意げなさま。
2 執念くあら捜しする。
3 意力喪失の体。竦然たる貌。
4 人を人として遇しない。
5 虎穴に虎子を求める類。

豚蹄穰田・洗垢索瘢・冒雨剪韭
探驪獲珠・豕交獸畜・吹影鏤塵
銷鑠縮栗・攘臂疾言

1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

氏名

(五) 次の熟字訓・当て字の読みを記せ。

- 1 蝙蝠
2 典侍
3 蛇舅母
4 鼠姑
5 馬鮫魚
- 6 波蘭
7 魚狗
8 蘭草
9 長庚
10 戴勝

(10)
1×10

(七) 次の1～5の対義語、6～10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。

□の中の語は一度だけ使うこと。

対義語

類義語

- 1 朝暾
2 爛漫
3 私淑
4 穎明
5 大牢
- 6 履端
7 悍馬
8 提撕
9 薄志
10 為政

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分

(20)
2×10

を漢字で記せ。

- 1 大はトウリヨウと為し、小は檳榔と為す。
2 ソクインの心は仁の端なり。
3 ゼイセイの悔い。
4 讒臣国を乱しトフ家を破る。
5 兵はキドウなり。
6 尺蠖堤を穿てば能くイチユウを漂わす。
7 ガクキュウ大鵬を笑う。
8 痛処にシンスイを下す。
9 テンになり兎になり。
10 天地を以て棺槨と為し日月を以てレンペキと為す。

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送り)がなに注意してひらがなで記せ。

(10)
1×10

〈例〉健勝……勝れる

けんしょう
すぐ

- ア 1 揣度……2 揣る
イ 3 愆戾……4 愆る
ウ 5 乖忤……6 忤う
エ 7 熨貼……8 熨す
オ 9 干黷……10 干す

(九) 文章中の傍線(1～10)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30)
2×10
1×10

【A】士はいたずらに父祖の穀祿に藉るを知つて、未だ文武の科を究むるを知らず。農はいたずらに郷土の常に仍るを知つて、未だ耕桑の術を講ずるを知らず。工はいたずらに傭作の価を論ずるを知つて、未だ器械の巧を求むるを知らず。商はいたずらにシシユの利を争うを知つて、未だ貿易の法を明らかにするを知らず。これ皆その力に食むこと能わざるものにして、そのさい一二才識を以て称せらるる者ありといえども、多くは請托機に投じ、ロウダン利を罔するの徒に過ぎず。はなはだしきは詐欺百出、誣冒万変、産を破り家を亡ぼすに至る者比比としてこれあり。今かくの如きの輩を駆つて、一朝にわかに開明の域に届らしめんと欲す、またなお卵を見てジャを求むるが如きなり。臣らかつて中夜窃かにいえらく、長く大都にあつて一たび海外に航し職を奉ずる久しからずとせず、事を関する多からずとせざれば、その智識昔日に愈るや必せりと。

【B】以為らく今の医学は、泰西自り来る。縱使其の文を觀、其の音を諷すれども、イヤシクも親しく其の境を履むに非ざれば、則ちエイシヨ燕説なるのみと。明治十四年に至りて、叨に学士の称をカタジケナくす。詩を賦して曰く「一笑す名優質却つて辱きことを、依然たる古態もて吟肩を聳やかす。花を觀ては僅かに覚ゆ真の歡事、塔に題すも誰にか誇る最少年。唯識る蘇生が牛後を愧ずるも、空しく阿逖をして鞭先を着けしむるを。昂々として未だ折けず雄飛の志、夢は長風に駕す万里の船。蓋し神は已に易北河畔に飛べり。未だ幾ばくならずして軍医に任ぜられ、軍医本部僚属と為る。テキチヨク執筆し簿書案牘の間に汨没すること、此より三年而して今茲の行有り。喜ぶこと母らんと欲すれども得べからざるなり。

【C】詔して曰く「朕、薄徳を以て恭しく大位を承け、志兼済に存し勤めて人物をブす。率土の浜、已に仁恕に落うと雖も、而もフテンの下、未だ法恩に洽からず。誠に三宝の威靈に頼りて、乾坤相泰らかに、万代の福業を修めて動植咸くに榮えんと欲す。粵に天平十五年歳はミズノトヒツジに次る十月十五日を以て菩薩の大願を發して、盧舍那仏金銅の像一軀を造り奉る。国銅を尽くして象を熔かし、大山を削りて以て堂を構え、広く法界に及ぼして朕が知識と為す。遂に同じく利益を蒙りて共に菩提を致さしめん。」

(注) 朕…天皇の自称。ここでは聖武天皇。

〔続日本紀〕より〕

(森鷗外「航西日記」より)

(洪沢栄一「雨夜譚」より)